

東洋史研究

第七卷
第六號

昭和十七年十二月發行

初代磧西節度使の起源と其の終末（上）

——碎葉焉耆更換事情の一考察——

佐藤 長

序 論

唐代の安西四鎮に關しては頗る錯綜した問題が多い。新唐書（卷二三）西域傳焉耆の條を見ると

開元七年「焉耆王」龍嫺突死焉、吐拂延立、於是十姓可汗請居碎葉、安西節度使湯嘉惠表、以焉耆備四鎮、詔焉耆・龜茲・疏勒・于闐、征西域賈、各食其征、由北道者、輪臺征之。

なる記録がある。これは安西四鎮の中の碎葉が焉耆に更換される事情を物語る唯一の記録なのであるが其の原因となつた情勢の推移には何一つ觸れる所がない。従つて十姓可汗が果して此の場合何人なりやに就いても記す所は一向ないのである。藤田博士は此の記事を以て「碎葉を突厥に與へた」と解され、大谷學士は「碎葉が回紇十姓可汗の手に歸した」と述べられて居る。^②此等兩説に對しては松田學士は當時の狀況判斷の上から到底成立し得ないとし、十姓可汗を阿史那獻と認められた。^③藤田大谷兩氏の説に就いては松田學士の批判に其のまゝ従つてよ

い。しかしさりとて松田學士の新に提出せられた阿史那獻説には直には賛成し得ないものがある。寧ろ氏が一旦取り上げて否定せられた突騎施可汗の蘇祿こそ開元七年の十姓可汗なのではなからうか。尤も此の問題に就いては頗る複雑な論證を必要とし、直に十姓可汗の解釋のみを以てしては解決は困難なのである。當時の西域の事情は必ず並行的に把握理解されなければならない。その煩雜さに於ては確かに此の問題は難問の一つたるを失はぬ。特に景龍の末年より開元の中期にかけての西突厥乃至は突騎施の狀態は複雑極まるものがあつて松田學士の優れた史料批判に於ても充分に検討し盡されて居ない。もとより自分とても何等現在特別な重要史料を提出するのではないが、只當時の狀況判斷を可能なる範圍に於て正確に行へば同一史料の解釋も亦異つて來るであらう。敢て異見を開陳するのも結局はかゝる平凡な方法に導かれた結果に外ならない。特に大方諸賢の叱正を乞ふ次第である。

さて問題の中心は十姓可汗が果して阿史那獻であるか或は突騎施蘇祿であるかと云ふ點に置かれて居る。從つて先づ阿史那獻の事蹟を明かにしておかなければならない。阿史那獻は初代の磽西節度使であつて彼の節度使としての活躍は一々當時の西域狀勢の變轉を反映して居る。よつて本稿に於ては磽西節度使なるものが如何にして起つたか。それを起らしめた事情は如何なるものであつたか。此等の點からして先づ第一に考察を始めて行かう。思ふに初代磽西節度使は開元元年から七年までの間繼續しそして其の最後が碎葉焉耆の更換と云ふ結果を將來するからである。

本 論

一、景雲元年以前の東西突厥の狀勢に就いて

最初に北方乃至は西方の狀勢を概觀して置く。

北方に於ては東突厥が南北朝末期から唐初にかけて猛威を振つて居た。しかし唐の太宗の時代には外には磧北鐵勒諸族の反叛、内には諸侯間の反目鬭爭、此等が激化した爲に漸次混亂狀態が交起しつゝあつた。遂に貞觀三年に唐將李靖の討伐が行はれ、可汗頡利は擒へられその部衆は降戸として邊塞の地區に安置せられた。しかも十年後には人口頗る増加し畜牧亦大に蕃殖して再び北還する事となり貞觀十三年には頡利の後繼者阿史那思摩は歸化城方面の陰山を根據地として活動を開始した。是實に將來の突厥復興の萌芽をなすものと云つてよい。永淳元年頃より突厥には英傑骨咄祿 Qutluy——所謂 *Algis qayan*——が出で部内の統一は益々強固にその疆域は益々廣大になつて行つた。唐の記録を見ると突厥の勁騎は専ら雲朔代定の地を侵し、西は黃河南の豐州を脅かして居、東は嬌州を略し、南は河北山西の北邊から黃河の北方にまで勢力を及ぼして居る。^⑤更に噉欲谷碑文を見るに可汗は十七度支那と、七度契丹と、五度オグズと戰つた事が記され、支那との交戦は特に多く數へられて居るが同時に契丹オグズ方面の經略も決して忽せにはされて居ない。^⑥只西方は西突厥が内訌の爲に唐に乗ぜられて不振に陥り、加ふるに咸亨元年から長壽元年まで吐蕃の活動が安西都護府の占領にまで進んだから突厥の西邊は何等脅かされるものはなかつた。故に骨咄祿の時代には西境は割合に平穩であつたと見てよいであらう。所が此の形勢は延載元年に骨咄祿の弟默噉——所謂 *Kapayan qayan*——が可汗の位を繼いだ時から漸次變化を見せるやうになつた。默噉の東方經略については今述べないが、兎に角其の勢力は再びシラムレン方面にまで及んだ。支那に對しても聖曆二年邊境方面に侵略を試みて之より終始叛服常なく唐朝を困惑せしめたが、積極的な活動は行ふに至らなかつたやうである。原因は當時西突厥方面に突騎施 *Turges* が勃興し東突厥と拮抗する狀勢を馴致しつゝあ

つたからであらう。

所で西方に一度眼を轉すると、是より先西突厥は太宗代に有名な統葉護可汗 *Ton iadyu qayan* が歿して後は内訌が始まつて可汗の交代が相繼いで起つた。西突厥内部は東西二部に分裂してイリ河以東は乙昆咄陸可汗に屬し、以西は咄利失に屬する事になつた。此の東西二系統がそれ／＼咄陸弩失畢の二部を領有して成立した事は更に長い間西突厥の内亂を繼續せしめた。貞觀十三年には咄利失は部下の爲にフエルガナ方面に窮死せしめられた。咄利失の弟の子薄布特勤は弩失畢の酋帥等に推されて乙昆沙鉢羅可汗となり、東の咄陸可汗に對抗するやうになつた。咄陸可汗の根據地は鐵葛山の西であり、葉護可汗のそれは睢合水であつて、前者を北庭、後者を南庭と云つた事は茲に事新しく云ふまでもない。^⑧ 北庭の咄陸可汗は西域方面に勢力を張り後に葉護可汗を仆すまでになつたが部下の統御宜しきを得ず、衆は多く亡散して其の國は大に亂れるに至つた。之に對し南庭は恐らく弩失畢を其の勢力範圍とした乙昆射匱可汗が立てられ親支的な政策を施行し咄陸を凌ぐ勢になつて來た。咄陸可汗の方では弩失畢は皆之に反叛したから射匱可汗の興起は容易に行はれ得たのであらう。唐が之を充分支持したのも與つて力がある。射匱可汗は咄陸可汗を盛に攻撃してトカラ方面に遁竄のやむなきに至らしめた。しかし咄陸可汗の勢力は之を以て終つたのではない。續いて此の系統は阿史那賀魯に繼がれ、最も深酷な事態が惹起される事になるのである。阿史那賀魯は阿史那步眞の内附後代つて咄陸可汗の葉護となつたもので西州北の一千五百里の多邏斯川 *Kara iris* ^⑨ にあつて處月處密姑蘇歌邏祿弩失畢五姓の衆を統治したと云ふ。處月處密は貞觀十六年に郭孝恪の征討を蒙り處月俟斤の域は拔かれ、處月の衆は降服せしめられた。弩失畢も前述の如く咄陸に心服しないで居たので咄陸の西竄により自由になると同時に射匱の支配下に入つたものらしい。射匱が白水に咄陸を討つた

時には弩失畢の兵が發せられて居る。賀魯が一時咄陸と離れ、その支配の地を悉く射匱に奪はれて東方に孤立せしめられた事は疑ない。彼が「厥の居を常になくなつて貞觀二十二年に其の部落を率ゐて内屬し、詔して庭州に居らしめられた」(舊唐書西突厥傳)の、右の如き事情によるものである。先に一言した乙毘射匱可汗が貞觀二十年六

月に太宗に昏を請うた時(資治通鑑)

(資治通鑑)

太宗は令して龜茲于闐疏勒朱俱波葱嶺の五國を聘禮として與へんとした。此の婚

は如何なる理由によつてか遂に行はれずに終つたらしい。^⑩射匱可汗の消息は以後史上に見當らなくなる。而して

阿史那賀魯は唐の龜茲討伐に際し、郷導とならん事を願つて崑丘道行軍總管となり(資治通鑑貞觀二十二年夏四月の條)、戰役終つ

て庭州莫賀城に屯して密かに散亡の部衆を糾合した。かくして彼は太宗の歿後永徽二年に西突厥全體を擧げて唐

朝に反叛し、勢當るべからざるものがあつた。唐は直に征討の軍を起し、蘇定方任雅相等の名將は西進してしき

りに賀魯の軍を破り、賀魯は身は俘虜となつて纔かに死を免される結果となつた。此の賀魯の叛亂はかなり大規模

のものであつただけに反つて唐朝には西方拓疆の機會を與へた。唐では其の種落を分つて崑陵濠池の二都護府

を置き、所屬の諸國には州府を置いて、總て安西都護府に隸せしめる事とした。此の時にも崑陵都護の阿史那彌

射は興昔亡可汗となつて五咄陸部落を統領し濠池都護の阿史那步眞は繼往絶可汗となつて五弩失畢部落を支配し

て、西突厥部内の東西對抗の形勢は依然として解消さるべくもなかつた。しかも兩者の鬭争は當時既に西域南道

方面に勢力を伸張しつゝあつた吐蕃の注目する所となり、吐蕃は西突厥部酋の阿史那都支と儀鳳二年連兵して安

西方面を脅かした(新唐書西突厥傳、同裴行儉傳)。都支は繼往絶可汗阿史那步眞の後を繼がしめられたものであるから其の根據

地は弩失畢地方に相違なく吐蕃の弩失畢方面への勢力進展は此の時既に始まつて居たのであらう。事實吐蕃は長

壽元年にも西突厥の阿史那倭子と聯合して武威道に寇して居り(新唐書西突厥傳)突騎施の霸權が確立した後も其の可汗

は吐蕃と聯絡を絶たなかつたのである。吐蕃の弩失畢方面に於ける勢力の繼續は推して知るべきである。もとより吐蕃の勢力は儀鳳二年以後急に西突厥特に弩失畢方面に確立したものは考へ難い。長壽二年には王孝傑によつて安西方面より一應は撃退された。^⑩只注意すべきは西突厥本蕃が唐朝任命の可汗と融和せず、又兩可汗とも抗爭を繰返す中に吐蕃に侵略された混亂ぶりで結局かゝる混亂を素地としてはじめて此の事件に繼起する突騎施の勃興が理解されて來るであらう。

さて愈々突騎施の興起に就いて述べるのであるが、最初の可汗たる烏質勒はもと阿史那步眞の子で繼往絶可汗となつた斛瑟羅に仕へて居た。步眞が乾封年間に死んだ後は咸亨二年に阿史那都支が左驍衛大將軍兼旬延都督となつて部衆を安輯した。所が彼は前述の如く儀鳳二年に吐蕃と相應じて叛亂を起し終に唐朝に平けられてしまつた。彼が繼往絶可汗となつた史料は見當らないけれど新唐書西突厥傳に「步眞の部衆を安輯した」とあるからには弩失畢は彼の支配を受けたに違ひないであらう(參照^⑪)。斛瑟羅が繼往絶可汗となつたのは都支の討滅後若干年を経過した後である。舊唐書西突厥傳によれば彼は垂拱の初に彌射の子元慶と共に西突厥を分統することになり、勿論その系統からして彼は弩失畢方面を分領した。阿史那賀魯の亂後尙内訌が連續して居たと云へ見逃し難いのは唐の西突厥に於ける勢力の増大であつて當時東方に復興の勢熾なりし突厥の默啜が漸次之に注意を拂はざるを得なくなつたのも當然であらう。舊唐書西突厥傳には、

自垂拱已後、十姓部落頻被突厥默啜侵掠、死散殆盡、及隨斛瑟羅纔六七萬人、徙居内地、西突厥阿史那氏於是遂絶。

とあつて突厥の攻撃の爲斛瑟羅は遂に内地移轉を餘儀なくせられた事を述べて居る。此の記事では移轉の年次は

示されて居ないけれど同傳の別條には天授元年に彼が左衛大將軍竭忠自主可汗漢池都護なる新官職を賜つた事を云つて居る。よつて恐らく此の天授元年に彼は本蕃から退却したものであらう。さもなくば可汗號まで變更せられる筈がないからである。斛瑟羅の内徙によつて西突厥は其の統制者を失つたが天授元年に直に突騎施が後々までも根據地として居た碎葉城を取つたとは考へがたい。^⑨ 突騎施の烏質勒は最初斛瑟羅に仕へては居たが、西突厥の部衆が斛瑟羅の秕政を厭つたのに乘じ、漸次自己のもとに糾合して遂に霸權を握る事となつた。長壽二年を以て吐蕃は安西方面から退却して其の壓力は減退したが、唐も亦未だ本格的に此の方面の經營が整はなかつたから烏質勒の勃興は充分誘致せられるべき素地が出来て居た。新唐書西突厥傳には、

突騎施烏質勒西突厥別部也、自賀魯破滅、二部可汗皆先入侍、虜無的君、烏質勒隸斛瑟羅、爲莫賀達干、斛瑟羅政殘、衆不悅、而烏質勒能撫下有威信、諸胡順附、帳落浸盛、乃置二十都督、督兵各七千、屯碎葉西北、稍攻得碎葉、卽徙其牙居之、謂碎葉川爲大牙、弓月城伊麗水爲小牙、其地東隣北突厥、西諸胡、東直西廷州、盡并斛瑟羅地。

と記して此の間の事情を傳へて居る。舊唐書西突厥傳にも同様の事が記されてあるが其の四圍は、東北與突厥爲隣、西南與諸胡相接、東南至西廷州。

となつて居る。兩書共に碎葉の占領された時期については默して何も語つて居ない。新唐書^(卷四)焉耆都督府の條を見ると、

貞觀十八年滅焉耆置、有碎葉城、調露元年都護王方翼築、四面十二門、爲屈曲隱起伏沒之狀云。

とあり、同じく^(卷二)吐蕃傳を見ると、

〔長壽元年吐蕃〕首領勃論贊、與突厥僞可汗阿史那倭子南侵、與王孝傑戰冷泉敗走、碎葉鎮守使韓思忠、破泥熱沒斯城。

とある。唐初に於ける碎葉鎮の活動については別の機會に詳説する豫定であるが、兎に角調露元年以後若干年は明かに健全であつて長壽元年にも唐の鎮守使が此處に駐在して居た事は疑ない。前述の如く安西方面に於いては少くとも此の長壽元年までに吐蕃が勢力を張つて居たからには突騎施の伸展する餘地はないであらう。烏質勒の碎葉占領は長壽元年以後に行はれたと考へるのを妥當とせなければならぬ。所で冊府元龜（卷九）繼襲の條を見ると、

聖曆中突騎施首領烏質勒移衙於碎葉。

なる一文を發見する。烏質勒が其の子の遮弩を遣はして入朝せしめたのは聖曆二年に當り（新唐書西突厥傳、冊府元龜卷三、資治通鑑）恐らく碎葉を占領して名實共に西突厥十姓の首領たるべく唐の承認を要求したものに相違ない。されば斛瑟羅はもはや絶對本蕃に歸れなくなつたわけで新唐書西突厥傳の、

聖曆二年以斛瑟羅爲左衛大將軍兼平西大總管、令撫鎮國人。

なる記事は全く之に相應するものでなければならぬ。即ち此處には斛瑟羅の官職名は天授元年のそれより更に空名化して居るのであり、「國人を撫鎮せしめる」事も内容のない形式的な叙述に過ぎないものとなつて居る。事實同傳は續けて、

是時烏質勒兵張甚、斛瑟羅不敢歸、與其部人六七萬內遷、死長安。

と云つて斛瑟羅が全く本蕃を離れた事を再確認するに至つて居るのである。

さて碎葉鎮の位置は唐にとつては頗る重要なのであるがもはやなくなつては如何ともなし難い。元來碎葉は西突厥の王庭として其の名を顯はして來るのであるが、單に遊牧民族の根據地としてその存在があるのではない。

西突厥がマヴェランナフルに權力を張つた時ソグド人の商人は頗る敏感に職業意識を働かした。彼等は忽ちの中に西突厥を保護者と仰ぎ東方通商に専念した。勿論それ故に碎葉にはソグドの商人等がかなりの程度に入り込みに相違ない。調露元年王方翼が碎葉城を築いた時には「西域胡縱觀、莫測其方略、悉獻珍貨」であつたと云ふ(新唐書卷四三下 焉耆都督府の條)。「西域胡」は云ふまでもなく唐代の用法ではソグド人にあたり、「珍貨を獻じた」からにはソグド商人と見做して誤あるまい。當時安西方面は吐蕃の活動で不安が漲つて居たので商業活動は阻害される所少くなかつたであらう。幸にして吐蕃の勢力は碎葉にまでは及ばなかつた。唐は當然此の場合碎葉と輪台焉耆方面の交通を確保すべきであつた。王方翼が碎葉に赴いたのも此の任務を負うたものと推測せられるのである。

要するに商胡は治安の確實なる所へ、その通路を求めるのであつて、碎葉はかくして南北朝以來漸次重要な性格を具へつゝあつたのであらう。故に胡人にとつては西突厥の内亂は最も好まない所であつた。本蕃に何等人望のない可汗が唐から遣はされた所で政治的状態は不安を重ねる許りである。ソグド人は如何にしても本蕃の實力者を支持せざるを得ない。烏質勒は「能撫下有威信」であるばかりでなく實に又「諸胡順附」する(新唐書西突厥傳)。西突厥の覇者であつた。彼が單に西突厥別部の出身であり、しかも碎葉の西北に窮蹙して居たに拘はらず遂に碎葉に入り得た原因は右の如き事情に求め得ると思ふ。突騎施とソグド人は其の相互扶助により各々異なる意味に於て一致した勢力圏を擴大しつゝあつたのである。

兎に角客觀的狀態は明かに唐に不利であつて結局碎葉鎮は一時拋棄されてしまひ、突騎施は此處を根據地とし

て其の全盛時代を招來した。新唐書西突厥傳には、

聖曆二年遣子遮弩來朝、武后厚加慰撫、神龍中封懷德郡王、是歲烏質勒死。

とあり、突騎施に對する唐の態度は極めて友好的なものになつて來て居る。⁽¹⁴⁾

二、對突厥共同戰線の瓦解

東方戰線の始末——河西節度使の起源

烏質勒の死後西突厥の權威は其の子の娑葛によつて繼がれた。烏質勒の死因に就いては一時唐と突騎施との間に危機が到來した^(參照註⑭)。しかし結局郭元振の機宜の處置によつて事なきを得た。娑葛の此の後の行動を見ても唐と突騎施との關係は割合に圓滿に行つて居る。兩者の關係の圓滿なのは西域方面の事態の安定を意味するが此の密接な關係は東方に蟠居せる突厥にとつては一つの不安の種であつた。景龍二年の春に突厥の默啞は衆を悉して西方突騎施の大討伐を敢行する。唐の朔方道大總管の張仁愿が盧に乗じて漠南の地を取り三受降城を築いたのも此の時である^(資治通鑑景龍二年三月の條)。突厥が漠南朔方方面に寇掠を行ひ得なくなつたのは三受降城の建置に原因が求められる。けれども唐としては別に何等突厥に對して積極的に軍事行動を起す考へはなく漠南方面を防備する事を以て専ら當面の目的として居た。故に默啞の方でも此の後朔方方面への作戰は行はず只管西方突騎施と唐の西域經營諸施設を攻撃する事に力を集中しはじめた。景龍二年には後述する如く突騎施に内訌があり、唐が之に干涉した爲に再び兩者間に危機が訪れた^(次號參照)。しかし是亦郭元振の活動によつて圓滿解決を見るを得た。毗伽可汗 Bilga qayan の碑文によると突厥の西征は長安三年頃にはアルタイ北方の拔悉密 Basmir に對して行はれ、景龍三年にはアルタイ西方の黠戛斯 Qiyaz にまで經略が伸びて居る。岩佐學士は黠戛斯の突厥に對する反叛は唐突

騎施と密接な聯絡ある事を推定せられた。かくして景雲元年には突厥は各個擊破の方法を取り先づ點受斯經略を進めて之を屈服せしめ、其の直後には遂に唐突騎施との一大決戦を行ふに至つた。^①唐大詔令集(卷一)「命呂休璟北伐制」には景龍四年の五月には突厥に對して唐と突騎施との聯合軍が西は碎葉から東は涼州に至る大戦線を構成した事が述べられて居る。

金山道前軍大使特進賀臘毗伽欽化可汗突騎施守忠、二庭貴緒、萬里聲威……志勤於中國、兼遣弟右監門衛軍守節、長驅沙漠、直指金微、默啜舉其種類、來相抗拒、近殲於鋒鏑之下、已若亂麻、遠憑於廟堂之上、將如破竹、堅昆在右、犄角而東並、累獻封章、請屠巢穴、朕又聞、不得已而用者、孰若兵機、不可得而遺者、廼符人事、永言取亂、宜戒徂征、右領軍衛將軍兼檢校北庭都護碎葉鎮守使安撫十姓呂休璟、心堅鐵石、氣橫風雷、始則和戎之利、先得晉卿、終而逐敵之功、永邀漢將、金山道行軍大總管北庭副都護郭虔瓘、安處哲等、懷才抱器、著銳俟時、慣習軍容、備知邊要、並可爲副大總管、領瀚海北庭碎葉等兵、漢兵及驍勇健兒五萬騎、金山道前軍大使特進賀臘毗伽欽化可汗突騎施守忠、領諸蕃部落兵健兒二十五萬騎、相知計會、逐便赴金山道、朔方道行軍大總管右武衛大將軍攝右台大夫同中書門下三品上柱國韓國公張仁亶、文武將相、莫之與京、心腹爪牙、是所繫賴、當分闔之任、受昇壇之律、嘗願身先士卒、不以賊遺君父、與大總管大監門衛大將軍魯受信等、將蕃漢兵募健兒武用絕羣飛騎城傍等十五萬騎、赤水軍大使涼州都督司馬逸客、外寬內明、正辭直道、標慷慨之節、曾不顧身、蘊經營之志、期於盡敵、右武衛將軍陳家正、右金吾衛翊府中郎將李元道、副使右驍衛鹿陵府折衝能昌仁、左衛神山府陳義忠等、領當軍及當界蕃漢兵募健兒七萬騎、豐安軍大使靈州都督觀察副使張趙璧、常元寂等、領漢兵馬六萬騎、防禦羣牧大使臨洮軍使甄亶領當元莫門積石等軍兵募及祭蘭渭成等州大家子弟總二萬騎、建康軍使□州刺

史李守微、玉門軍使肅州刺史湯嘉惠、墨離軍使瓜州都督李思明、伊吾軍使伊州刺史李春交等、各領當軍兵馬、與突騎施守忠呂休璟等計會、共爲表裏。

制は景龍四年五月十五日に出されたものであり、突騎施可汗の守忠と北庭都護碎葉鎮守使の呂休璟を中心に默噉を討伐すべき事を命じて居る。突騎施守忠は云ふまでもなく娑葛の賜名である。唐と聯合した突騎施の戰意は大に宣揚されたに相違ない。所が景龍四年は唐に取つては頗る困難な問題の起つた年である。五月十五日に此の制が出て直後六月には中宗は皇后韋氏の一派に弑殺せられた。溫王重茂が後を繼いで立ち唐隆と改元はしたが是亦七月には平王隆基の舉兵によつて廢位せられてしまひ、隆基は直に父の睿宗を立て、景雲元年と改元した。此のめまぐるしい政局の變轉は唐朝の内外に深酷な影響を及ぼしたものと想像せられる。新舊唐書等の諸史は東突厥との決戰に關する記事を一切載せて居ない。さうして只、

初默噉景雲中率兵西擊娑葛、破滅之。(舊唐書西突厥傳、新唐書突厥傳もはゞ之に同じ。)

と云つて但默噉と娑葛とのみの小事件の如く扱つて居る。しからば此の唐の内訌は兩者間の決戰回避の原因となつたものであらう。唐は聯合戰線より急遽脱退、爲に有力な支柱を失つた突騎施は獨力で突厥に抗戰を行はなければならなくなり、遂に慘敗を喫したものと考へられる。脱退した唐軍はそのまゝ武裝中立の状態に入る事になつたが、一旦突騎施の味方である事を宣言して居るのであるから默噉に攻撃される危険は充分にある。さなぐとも碎葉より涼州に至る戰線に一度動員せられた軍隊の後始末はさう簡單には行くものではない。總指揮の地位にあつた呂休璟は一時的にはもとの北庭都護碎葉鎮守使に還り得たかも知れない。しかし伊州より涼州に至る軍隊は個々獨立のもとの體制に返すには餘りにも不安である。河西節度使の起源は實に此處に存する。新唐書方鎮表

を見ると河西節度使は景雲元年に置かれて居る。通典(卷三)唐會要(八七)・新唐書(四四)等には景雲二年に置かれたとし、後世の書も之に倣ふものは甚だ多い。しかしこれは景雲元年を正しとする事岩佐學士の論考によつて決定された。¹⁷⁾恐らく唐が對突厥戰線から脫退すると同時に後始末の一つとして此の節度使は置かれたものであらう。方鎮表には、

置河西諸軍州節度・支度・營田・督祭九姓部落・赤水軍兵馬大使、領涼甘肅伊瓜沙西七州、治涼州。

とあり、伊州以東は總て含まれて居る。たゞ西州が加へられて居るのは多少奇異の感がないでもないが、之に就いては安西都護との關係を充分考察しなければならないから詳しい事は別の機會に譲る。河西節度使の成立は岩佐學士によれば「吐蕃に對しては鄯州都督楊矩があつて和好の策をなして居たやうだから涼州が其の脅威を受けたとは思はれない。よつて思ふに景雲元年赤水軍大使涼州都督が河西諸軍州節度支度營田等使となり河西諸軍州を節度する事になつたのは恐らく突厥のアルタイ經略、突騎施征服の爲、北庭河西の地が直接突厥の勢力に脅威されるに至つた結果である」と云ふ。¹⁸⁾此の見解は大體に於て正しい。しかし景雲元年には未だ突騎施方面の經略は行はれて居ない。景雲元年には恐らく岩佐學士の推定の如く突厥の點戛斯の經略が行はれて居たらう。¹⁹⁾松田學士は資治通鑑(卷二〇一)景雲二年の條に、

十二月癸卯、以興昔亡可汗阿史那獻爲招慰十姓使。

とあるのを注意し、多分「招慰十姓」なる役は突騎施慘敗の直後事態收拾の爲に急遽阿史那獻に與へられたものと解せられた。²⁰⁾十二月とある事からしても突騎施の敗北は此の年即ち景雲二年と見倣してよいであらう。岩佐氏は松田氏の此の考には注意を拂はれなかつたと見えて結局斷定は避けて居られる。若し景雲二年説が成立する

と突騎施の勢力範圍である北庭西州方面は景雲元年には未だ攻撃を受けて居ないことになる。尤も元年には點憂斯方面への經略が相當進展しつゝあつたと認められるから、その危険を感じてかゝる處置が取られたとも解し得ない事はない。しかしそれは北庭方面の施設が新に行はれた場合の説明にはふさはしくはあつても、わざ／＼地理的には當然北庭に屬すべき伊州西州を離して河西四郡の諸州と共に一括して河西節度使を置いた事の説明にはならないであらう。前に述べた如く景龍二年には三受降城が築かれて朔方道大總管がこれを統率しては居るが、直接東突厥の西征を防禦するものとしては北庭都護府が存在して居る。河西節度使がおかれたのは則ち此等兩者の間であり、結局中立狀態維持の爲の一時的な軍政的措置であつたのではなからうか。間もなく伊州西州が河西節度使から北庭乃至は安西方面に其の管轄を變へるのも、何等この節度使の成立の初期には軍事的には積極的な意圖が含まれて居ない爲であらう。河西節度使が河西節度使としての意義を持つのも突厥との關係からではなくて寧ろ吐蕃との關係によるものに相違ない、文苑英華(卷九)行狀の張説の撰した「兵部尙書代國公贈少保郭公行狀」には、

吐蕃與突厥連和、大入西河、破數十城、圍逼涼州、節度出城戰沒、蹂禾稼、斗米萬錢、則天方御洛城門酺宴、涼州使至、因輟樂、拜公爲涼州都督、兼隴右諸軍大使、調秦中五萬人、號二十萬、以赴河西。

とあるが、郭元振の涼州都督隴右諸軍大使となつたのは大足(長安)元年の十一月であつた。(資治通鑑同年條、冊府元龜卷四二九將帥部拓)此の文と毗伽可汗碑文との正確な對校は岩佐學士の研究に譲る。(21)要するに長安元年には東突厥と吐蕃との間には連絡が出来、涼州は襲はれて居るのである。安西方面の吐蕃は既に長壽年間に撃退せられたから右の場合の吐蕃はココノール方面から出撃して來たものに相違ない。先天の初に沙陀突厥が北庭に従つて保護を求めて行

つたのも、吐蕃を避けるのがその原因であつた（新唐書卷二八八沙陀傳）。吐蕃の勢力がタリム方面に如何なる形で伸びて居たかは直には明かになし難い。しかし南道方面には西藏的色彩はかなりに濃厚であつたと思はれる。

遡及すれば隋は大業四年には吐谷渾を討ち西海河源鄯善且末の四郡を置いた（隋書卷三 煬帝紀上）。唐は貞觀九年に李靖

をして吐谷渾を討たしめ再び鄯善・且末方面を吐谷渾から奪取した。諸將の中、鄯善道行軍總管任城王道崇、且末道行軍總管李大亮なる名は唐朝の遠征の目的の那邊にあるかを明かにする（舊唐書西戎 傳吐谷渾）。吐谷渾は後に吐蕃の

爲に滅され、その勢力範圍は取つて代られるのであるが、恐らく其の時に此の地方は唐を離れて吐蕃の手に移つたのではないかと思ふ。しかし吐蕃の勢力下に入つたからと云つて此の地方が直に吐蕃の人衆を以て滿されたのではない。元來此の地は吐谷渾の商業活動の中心地であつたので、依然として吐谷渾の末裔は一種の特殊地帯を

作つて活動して居た。^②而して藤枝學士が那波博士の手抄本によつて紹介せられた所謂「僕射變文」（二十一—三

行）には回鶻と吐渾とが伊州の西の納職縣に住んで居て伊州に入寇したので歸義軍節度使の張議潮が大中十年六月六日に彼等を擊逐したと述べられて居る。^③吐谷渾が如何なる時に如何にして此の地方に植民し得たのかは不明

であるにしても、納職はもと／＼鄯善方面に根據のあつた胡人の植民地として發展したものであつて、吐蕃制壓下に全く政治的勢力を失つた彼等吐谷渾が本來の商業的性質を働かして此等兩地間の連絡をたどつた事は推察に難くない。北方納職にまで吐谷渾が居住するやうになつたのは確かに此の連絡によるものであらう。先天元年頃に吐谷渾が納職方面に其の勢力を伸ばして居たかどうかは尙知る事を得ないけれどもそれは毫も差支へない。要するに鄯善方面の支配者がかゝる連絡路をたどつて北道方面の要衝を脅かすに至る事を認めれば事足りる。通鑑

景雲元年の條には、

安西都護張玄表侵掠吐蕃北境、吐蕃雖怨、而未絕和親、乃賄鄯州都督楊矩、請河西九曲之地、以爲公主湯沐邑、矩奏與之。

とあり吐蕃の勢力が少くとも西域南道を支配下において居た事を思はしめる。しからざればこの南道への連絡路の側面にあたる河西九曲の地を問題とする理由がなくなるであらう。「怨むとは雖も和親を斷たなかつた」のは結局はより大きな利益を目指して居たからであり、楊矩を動かす事によつてそれが可能であると信じて居たが故に外なるまい。楊矩は金城公主が入藏した時の隨從者の一人で吐蕃の内情を特別よく知つて居た。河西九曲の地を得て吐蕃は東方進出の重要な據點を此處に選んだのである。遂に開元二年には臨洮方面に寇し、蘭州・渭州に入つて監馬を掠するに至つた（舊唐書吐蕃傳上）。責任者の楊矩は自殺し、金城公主入藏による唐と吐蕃との和平は茲に破れ去つた。河西節度使の活動はこれより若干年數が下る。少くとも鄯州方面が直接危機に瀕してより始まるのである。景雲元年におかれた河西節度使の任務はやはり突厥の入寇の危険より「迴廊地帶」河西を保護する爲であつたのであらう。但し此は前よりも繰返し述べた如く消極的なものである。若し唐が突厥に積極的に「對抗」するならば西州伊州以東と北庭碎葉方面と二つに分つ必要はない。寧ろ軍事的には碎葉より涼州までの總司令を置いて戰線を分裂せしめないのを適切とする。しかれば何故に西州伊州以東は北庭碎葉方面と離れて特殊な地帶を構成せねばならなかつたのであるか。

此の問題は寧ろ北庭碎葉方面の狀勢理解によつて解決を與へられるであらう。と云ふのは景雲初の突厥突騎施の間に行はれた決戰によつて此の方面の内情は一變したからであり、唐の之等についての諸對策は到底河西方面の如く消極的な一時的安逸を貪る事を許されなかつたからである。

三、西方戦線の始末——積西節度使の出現

さて前述の如く景龍四年の對突厥共同戦線が構成せられた時に總司令は呂休璟であつた。唐の内訌による脱退と同時に呂休璟はもとの北庭都護碎葉鎮守使に返り得たかも知れぬ。所が孤立した突騎施は默啜の猛攻撃を一身に浴び可汗及び一族は總て仆されてしまひ葛邏祿 Qarluq・姻類は背き去つて覇業は根底から覆へされてしまつた。かゝる場合の十姓諸部落の混亂は推察するに難くない。突騎施の慘敗はそれまで懷柔に成功して來た唐に取つては眞に遺憾とした所であらう。しかし今は又西突厥に於ける唐の實權恢復の絶好の機會でなければならぬ。多年唐に仕へて忠誠を致した興昔亡可汗阿史那獻を唐朝では急遽景雲二年十二月に安撫招慰十姓大使となし、
(資治通鑑) 先天元年十一月には北庭都護となして此の方面の經營に當らしめた(唐會要卷七八 安西節度の條)。西突厥の勢力範圍は單に北庭方面のみではなく安西碎葉から遠くフェルガナ、ワカン方面にまで及んで居る。阿史那獻の任務は單に北庭都護の職のみでは務まるものではない。全唐文(卷二)「授阿史那獻特進制」は之に就いて絶好の史料を提供する。即ち彼は此の制では、

招慰十姓兼四鎮經略大使定遠道行軍大總管・北庭都護・瀚海軍使・節度巴西諸蕃國・左驍衛大將軍・攝鴻臚卿・
 上柱國・興吉可汗阿史那承獻。
昔亡?

と呼ばれて居る。遺憾乍ら此の制には日附が出て居ない。しかし北庭都護とあるからには先天元年十一月を遡るものではない。そこで一應新唐書(卷一)郭虔瓘傳を見ると、

開元初錄軍閥、累遷右驍衛將軍兼北庭都護金山道副大總管、明年突厥默啜子同俄特勤圍北庭、虔瓘飭壘自守。とある。此の事件は資治通鑑によれば開元二年二月乙未の事である。しからば郭虔瓘が北庭都護になつたのは開

元元年であり、従つて阿史那獻の北庭都護であつたのは開元元年以前と考へなければならない。全唐文の制は結局先天元年十一月より開元元年までの間のものとなつて來るのである。

所で此處に奇怪な史料が二つある。唐會要^(卷七)^(八) 安西節度の條を見ると。

先天元年十一月史獻除伊西節度兼瀚海軍使。

と記し、唐書^(卷六)^(七) 方鎮表にも先天元年の欄に、

北庭都護領伊西節度等使。

と述べて居る。伊西節度使なるものが現はれて來るのは前後たゞ此の二つの史料のみである。⁽²⁴⁾ 方鎮表の記載は暫く措くとしても唐會要の一句は充分注意しなければならない。若し此の文の如く伊西節度使と云ふものが存したならばそれは全唐文の阿史那獻の制の中に含まれて來なければならない。確に制の中には北庭都護なる文字がある。右の方鎮表の記載と照合して此の文字の中に含まれる可能性があるとは一應論じられない事もなからう。しかし景雲元年に河西節度使が成立した時には伊州西州はその管轄下に入つて居た。此等が翌々年先天元年に突然引き抜かれて何等の理由なくして伊西節度になる筈がない。且西州に軍が置かれたのは開元二年の天山軍を以て初めとし⁽²⁵⁾ 此の當時には未だ西州には軍が存在して居ないのである。伊州方面には明かに伊吾軍があつた。軍が伊吾軍のみで伊州西州を節度する伊西節度使は成立當時の他の諸節度使の大さに比較して寔に釣合はぬ珍妙な存在となるではないか。更に舊唐書の郭虔瓘傳を見よう。前述の如く開元二年に東突厥が北庭を攻めた時彼は之を死守した。戰後玄宗は彼の功を賞して詔を下して居るがそれには、

雲鷹將軍・檢校右驍衛將軍・北庭都護・瀚海軍經略使・金山道副大總管・招慰營田等使・上柱國・太原縣開國

子郭虔瓘。

と云ひ、彼と共に突厥軍を攻破した郭知運を、

宣慰將軍・守右驍衛翊府中郎將・檢校伊州刺史・兼伊吾軍使・借紫金魚袋・上柱國郭知運。

と呼んで居る。此によつて郭虔瓘の北庭都護の時代には伊州は何等北庭都護の下になく、且又伊西節度使なるものの管轄下にもなかつた事が明かである。阿史那獻の以前にも以後にも北庭都護に屬して居なかつた伊西方面が彼の時代にだけ屬して居たと見るのは誠に無理と云はなければならない。伊西節度使も同様彼の前後の時代に存在せず全唐文の特進制にも見えないのであるから、此亦實在のものとは認め難い。しからば何故に唐會要、方鎮表は伊西節度使を實在したかの如くに記して居るのであらうか。伊州西州が合して伊西と呼ばれた例は前掲の唐會要、方鎮表の外に當時のものとしては次の如くある。

A、〔開元十五年〕 三月又分伊西北庭、爲兩節度（唐會要卷七八）

〔開元十五年〕 分伊西北庭、置二節度使（新唐書方鎮表安西の欄）

B、〔開元十九年〕 合伊西北庭二節度、爲安西四鎮北庭經略節度使（同前）

C、〔開元二十九年〕 復分置安西四鎮節度治安西都護府、北庭伊西節度使治北庭都護府（同前）

D、〔天寶十三載三月〕 甲子以〔北庭都護程〕千里爲金吾大將軍、以封常清權北庭都護伊西節度使（資治通鑑）

〔天寶十三載〕 安西四鎮復兼北庭節度、是年復置二節度（新唐書方鎮表安西の欄）

E、〔乾元二年〕 楊公嗣子預、初以右武衛郎將見于行在、天子問以中興、遂西聚鐵關之兵、北稅堅昆之馬、特拜

左衛將軍兼瓜州都督、又遷伊西北庭都護（文苑英華四鎮節度副使楊公碑）

F、「建中三年五月」詔故伊西北庭節度使楊休明、固守西陲、殲身異域、贈司馬（舊唐書本紀）

舊唐書本紀によると建中二年七月以後には李元忠が伊西北庭節度使になつて居るからF史料の楊休明が伊西北庭節度使であつたのはそれ以前と知れる。李元忠以後は直接時代が關聯しなくなるから此處に觸れるのは避けよう。前掲の諸史料の中A Bのものは既に松田學士の犀利な考證により、伊西北庭が二節度に分たれたのではなくして伊西北庭が安西より分たれたものなる事が明かにせられた。^{②④}此の論斷は其等の史料が方鎮表の安西の欄に記入されて居る事からしても當然であつて確定的なものである。しからば以上の諸史料に於て伊西北庭節度使なるものの存在が認められても伊西節度使の存在は決して認める事は出来ない。唐書方鎮表の作者はA B Cの諸史料よりして匆卒に伊西北庭が二つの節度使に分たれ或は之が合せられたものと思ひ、伊西節度使なるものが開元十五年以前にもあつたと考へたのではなからうか。恐らくは全唐文の制に見える「節度巴西諸蕃國」の巴西は已西の譌なるべく、已・伊共に類似音なる爲伊西節度と誤つたのであらう。唐會要に先天元年阿史那獻が伊西節度になつた事を云ひ、方鎮表に同年北庭都護が伊西節度を領したと云ふのは結局皆誤であつてその原因は此處に求め得るのである。

尤も此の事は伊西節度使の存在が此の年になかつた事を示したのであるがさりとて唐會要の記載が全く誤つて居ると見做してよい事にはならない。方鎮表の「北庭都護領伊西節度等使」は明白なる誤としても唐會要の先天元年十一月に史獻を伊西節度兼瀚海軍使にしたのは單に伊西節度の存在を考へたのが誤つて居るだけで、瀚海軍使も共に否定し去るべきものではない。唐會要は北庭都護がA—Fの諸史料で見られる如く後に必ず伊西を節度した爲に、匆卒に彼が北庭都護となつた史料と節度已西諸蕃國なる史料からして右のやうに記したに過ぎないの

であらう。然らば先天元年十一月に彼が北庭都護になつたと云ふ事は否定さるべき何物もないのであつて、充分正しい事として認めてよいのである。

以上の如く伊西節度使が存在しない事は明かとなつたので問題は極めて容易に解釋を進め得る。再び全唐文の制の検討にもどらう。招慰十姓に就いては別に説明の要はない。四鎮經略大使は新唐書方鎮表景雲元年の欄に安西都護四鎮經略大使とあるから安西都護の職務である。定遠道行軍大總管の遠字は邊字の譌誤であらう。²⁷⁾ 北庭都護も前述した通りである。瀚海軍使は北庭都護の直轄であるから説明の要はない。問題は節度已西諸蕃國である。阿史那獻の前任者と推定せられる呂休璟の任務は北庭都護碎葉鎮守使であつた。今北庭都護は阿史那獻に引繼がれた。然らば碎葉鎮守使の職は何處へ行つたか。烏質勒・娑葛の突騎施可汗は碎葉に居て西突厥十姓に號令した。此の場合の碎葉鎮守使は北庭都護の遙領となつて居て實在しなかつたかも知れぬ。假令實在した所で突騎施の可汗が居た以上自由なる活動は出来なかつた筈である。そこへ可汗娑葛及び其の一黨が慘敗して西突厥再制覇の絶好の機會が唐に齎らされた。さりとて興亡繼住絶兩可汗の併置の例には唐は苦い經驗を嘗めて居る。且つかゝる場合の政情は決して交通路を安全にする何物もない。此處には如何にしても十姓可汗的な存在が必要となつて来る。それは單に一碎葉鎮守使の成し得る任務ではない。「節度已西諸蕃國」と云ふのは畢竟突騎施可汗に代り碎葉に居つて西突厥全體を支配し同時に唐の出先を統制するものでなければならぬ。「已西」は勿論先行する職名よりして北庭安西の謂であり、西突厥本蕃及び其の屬蕃並びに唐の安西北庭等の軍政機關に對する管轄權を示したものに外ならぬ。

阿史那獻の任務は此で完全に明かになつた。彼はおよそ突騎施が支配して居た西突厥の地を總て自己の傘下に

委ねられた。全唐文の制詔に表れた彼の職務は煩雜ではあるけれどもそれは西突厥の地を分割控制して居た唐の諸機關を一括しいば一元的な系統にした事を意味して居る。そこには相對立した咄陸・弩失畢の兩可汗もなく分立して相互の連絡のなかつた各都護乃至は諸軍州諸鎮もない。總てが阿史那獻の掌中に握られ有機的な密接な聯關を以て西域經營に邁進する事になるのである。

所が事態は刻一刻と豫想外の速度を以て變轉し續けて行く。突厥の默嚨は唐の西域經營に痛撃を與へんと準備しつゝあり、鄯州及び南道方面には吐蕃の進出が著しい。しかも西突厥の故地では叛亂の勃發する傾向が見えて居つて、突騎施の復興も漸く起つて來た。もとより娑葛が壊滅した時には右のやうな狀勢は考へられなかつたであらう。しかし今阿史那獻の場合は餘りにも負擔過重の傾向を帶びて來て居る。突厥・西突厥・吐蕃・突騎施をすべて經略する事は到底彼の獨力ではなし得るものではない。前に屢々觸れた如く開元元年には早くも北庭都護瀚海軍使の職は郭虔瓘に移されて居る。資治通鑑開元三年十一月の條には、

〔開元三年十一月〕丁酉、以左羽林大將軍郭虔瓘兼安西大都護四鎮經略大使。

とあるが舊唐書郭虔瓘傳には開元二年の突厥の北庭攻撃にかけて、

虔瓘以功授冠軍大將軍・安西副大都護。

とある故北庭死守の功が彼をして安西都護の要職に榮轉せしめたものであらう。但し本傳に安西副大都護とあるのは誤であつて實は副大都護は翌開元四年に陝王の安西大都護の遙領により彼が任ぜられた所のものである。故に開元三年には彼は單に安西都護であるのが正しい。

所で資治通鑑開元三年十一月の條には、

初監察御史張孝嵩奉使廓州、還陳磧西利害、請往察其形勢、上許之、聽以便宜從事、拔汗那者古烏孫也、內附歲久、吐蕃與大食共立阿了達爲王、發兵攻之、拔汗那王兵敗、奔安西求救、孝嵩謂都護呂休璟曰、不救則無以號令西域、遂帥旁側戎部落兵萬餘人、出龜茲西數千里、下數百城、長驅而進、是月攻阿了達于連城、孝嵩自擐甲督士卒急攻、自己至酉、屠其三城、俘斬千餘級、阿了達與數騎逃入山谷、孝嵩傳檄諸國、威振西域、大食康居大宛罽賓等八國皆遣使請降。

とある。此の文は極めて重要なので後にも亦觸れるが、今問題とするのは張孝嵩が拔汗那經略をなした時の安西都護が呂休璟であつた事である。張孝嵩の拔汗那經略の年次は今は知る事を得ない。しかし呂休璟は景雲元年五月十五日までは確實に北庭都護であつた。而して郭虔瓘は開元三年十一月丁酉に安西都護になつて居る。故に先づ呂休璟の安西都護であつたのは景雲元年五月十五日より開元三年十一月丁酉までであるに相違ない。所が前に一言した如く全唐文の制詔には阿史那獻が四鎮經略大使と書かれて居る。新唐書方鎮表には景雲元年の欄に、「安西都護四鎮經略大使」とある。之によつて史獻の安西都護となつたのは少くとも景雲元年以後と考へられる。若し彼が開元元年に磧西節度使に拔擢せられた時安西都護をやめたものとしたならば呂休璟の安西都護こそは此の開元元年より同三年十一月にわたつたものとなすべきである。呂休璟は最初突騎施と共同して突厥に當らんとした時の最高指揮官であり、唐室の内紛によつて此の戦線が瓦解した時には唐としても突騎施への面目上彼を以前の職にかへす事は出来なかつたのであらう。阿史那獻が急遽先天元年十一月には北庭都護を兼ねる事になり、彼は一旦退いたが景雲二年に突騎施の壊滅あり、よつて憚る所なく再び安西都護に返り咲いたものかと思はれる。突騎施破滅後の西突厥十姓は收拾すべからざる混亂に陥つたから吐蕃大食は東西トルキスタン進出の絶好の機會

を得たわけである。張孝嵩の出動を見た拔汗那方面の紛争も結局此の間の事情によるものでなければならぬ。要するに此の場合は阿史那獻の安西都護なる職が恐らく開元元年に呂休璟に譲られて居た事をのみ指摘すれば事足りる。

かくして阿史那獻は先づ北庭都護と安西都護の任務から解放される事になつた。此の二つの任務を除かれた彼の職は招慰十姓と節度已西諸蕃國のみである。節度已西諸蕃國の已西が北庭安西已西の謂なる事は前に述べた通りである。新唐書^(卷一)杜暹傳を見ると杜暹が開元四年に監察御史を以て磧西に覆屯した時の事件として、

會安西副都護郭虔瓘與西突厥可汗阿史那獻鎮守使劉遐慶更相訟。

と記して居る。此の中劉遐慶の稱號鎮守使が碎葉鎮守使に外ならない事は後に詳しく述べる筈であるが、然らば開元四年には既に碎葉鎮守使なるものが復活した事が知られる。碎葉が西突厥本蕃の地で占める位置の重要性は今更茲に述べるまでもない。右の史料にも明かな如く劉遐慶は阿史那獻の一派である。節度已西諸蕃國のもとには開元四年までに實質的な碎葉鎮守使が専任され西突厥綏撫の中心の責任を持しめられて居たのである。

今やかくして全唐文の制の中史獻の稱號として残つたものは招慰十姓と節度已西諸蕃國とのみになつた。開元元年頃に置かれたと推定される磧西節度使こそは正に節度已西諸蕃國の略稱乃至は俗稱に外ならなかつたのではない。河西節度使と普通稱されて居るものも其の起源は實は新唐書方鎮表景雲元年の欄に、

置河西諸軍州節度支度營田督察九姓部落赤水軍兵馬大使。

と記されるものであるのを見れば磧西節度使の稱號も同様な意味に於て節度已西諸蕃國の略稱乃至俗稱として差支へないのではなからうか。

磧西節度使と節度已西諸蕃國との内容的な關係、之を次に「磧西」なる語の検討によつて最後の解決へと歩一歩近づけて行つて見よう。

〔未完〕

補註

- ① 藤田豐八博士「西域研究」(史學雜誌第三十六篇)七九五—六頁、東西交渉史の研究(西域篇)三一〇頁
- ② 大谷勝彦學士「安西四鎮の建置とその異同に就いて」(白鳥博士還曆記念東洋史論叢)二三二頁
- ③ 松田壽男學士「碎葉と焉耆」(市村博士古稀記念東洋史論叢)一一一五頁以下
- ④ 前掲書一一一九頁。松田學士は「天授元年に碎葉を奪つた突騎施が三十年も後の開元七年に至つて改めて『請居碎葉』と云ふのは頗るをかしい」と云はれる。
- ⑤ 岩佐精一郎學士「突厥の復興」(岩佐精一郎遺稿)一〇五—六頁
- ⑥ 「エルテレス可汗(彼の)智……彼の勇によりて唐と十七度戦ひたり。契丹と七度戦ひたり。九姓と五度戦ひたり。」
Altutis qeyan bilig……tin titün tabyačqa jätü jüginiñ sünišči qiajka jätü sünišči oguzqa bäs stüti (Radloff;
Die altürkischen Inschriften der Mongolei, Zweite Folge, S. 22. Thomsen: Altürkische Inschriften aus der Mongolei
ZDMG. 1924. S. 169.)
- ⑦ 咸亨元年に吐蕃の攻撃によつて安西四鎮が陥落したとは現在までの通説であるが四鎮は決して全部が陥落したのではない。此の間の事情は碎葉鎮設置の問題と共に稿を改めて述べたいと思ふ。
- ⑧ 鐵馬山は新唐書西突厥傳の所載であるが舊唐書同傳には過索山とある。シャバンヌの考定では迪化の西三百餘里のカトン諸山の中にある。Chavanne: Documents sur les Toi-kue (Turks) Occidentaux. P. 31)
- ⑨ 唯合水是新唐書には雖合水とあり西域圖志卷二六にはイシツクル東北の河とするが明かでない。シャバンヌも何等定める事が出来ないと思つて居る。(Documents. P. 30)しかし唯雖合は Siŋtap で恐らく碎葉の同音異譯であらう。碎葉の地は既に貞觀の中期には南庭として存在して居るのである。シャバンヌの云ふ如くカライルティシユである。此の多邏斯川は決して千泉川方面のタラズと考へる事は出来ない。
- ⑩ 舊唐書西突厥傳には此の請婚について「太宗許之」とあり、新唐書同傳には「不克昏」とある。
- ⑪ 新唐書西突厥傳に、

歩眞死乾封時、咸亨二年以西突厥部酋阿史那都支爲左驍衛大將軍兼匭延都督、以安輯其衆。

とある。匭延都督については同傳に、

賀吳已滅、裂其地爲州縣、以處諸部、處木昆部爲匭延都督。

とあり、同書地理志には匭延都督府を他の五都督府と併せ記し皆五咄陸故地であると云ひ、北庭都護府の管轄に屬せしめて居る。故に匭延都督なる語からは彼が弩失畢方面に支配權を持つて居たとは云ひ難い。しかし前の方の引用文には明かに歩眞の死後の本蕃を安輯せしめた事を云つて居るから弩失畢方面に彼の根據はあつたに相違ない、咄陸方面の阿史那彌射は既に歩眞の讒の爲に誅せられて居り其の後繼者としては子の元慶が垂拱初に立てられる（舊唐書西突厥傳）までは何人も用ひられて居なかつたのである。歩眞はもと／＼彌射の部落を併せん事を欲しての策動であつたから彌射の死後はたとひ若干の反抗を受けたとは云へ其の目的を達したであらう。少くとも咄陸の一部はその支配下に置き得たのではないかと思ふ。彼は龍朔年間に事を成就し早くも乾封の時代には歿し去つたが其の支配した咄陸の一部が唐朝公認の匭延都督となつて阿史那都支に傳へられたのではなからうか。儀鳳年間になつて都支が十姓可汗と僭號して叛亂を起した（新唐書西突厥傳）のは都支が吐蕃の援助によつたとは云へ、もはや咄陸方面の一都督で満足し得なくなり、十姓全體の把握を目指したものに他なるまい。事實當時は西突厥に於ては咄陸方面の後繼者なく又十姓可汗とも稱すべき統率者も居なかつたのである。舊唐書西突厥傳に、

則天臨朝、十姓無主數年、部落多散失。

と記して居るのは之をよく物語るものである。

吐蕃のトルキスタン進出はいろんな意味に於て重要性があるが從來は頗る閑却されて居た傾向がある。此の事は近く別稿に於て詳細に追究する豫定である。

⑬ 松田學士は烏質勒が碎葉を取つたのは天授元年であるとされる。（同學士「碎葉と焉耆」市村博士、古稀記念東洋史論叢一一一八頁）。何によられたのか明かでないが恐らく誤解ではあるまいか。理由は本文に後述する如くである。

⑭ 烏質勒の歿年については新唐書西突厥傳に、

神龍中封懷德郡王、是歲烏質勒死。

とあるが資治通鑑には神龍二年閏正月甲戌とある。安西大都護の郭元振が軍事を議せんとして彼の牙帳に至り、氣候寒烈の爲に烏質勒が死したのは同書によれば同年十二月の事である。

安西大都護郭元振詣突騎施烏質勒牙帳議軍事、天大風雪、元振立於帳前、與烏質勒語、久之雪深、元振不移足、烏質勒

懼、且深在寇庭、逃將安適、安臥不動、明且入哭甚哀、婆葛感其義、待元振如初。

舊唐書卷九九、新唐書卷一二二の兩郭元振傳にも共に此の事件を「神龍中」の事として扱つて居る。只舊唐書西突厥傳には、景龍二年詔封「烏質勒」爲西河郡王、令攝御史大夫解琬就加冊立、未至烏質勒卒、其長子婆葛代統其衆、詔便立婆葛爲金河郡王、仍賜以宮女四人、

とあつてひとり景龍二年の事とするが、おそらく神龍二年の誤であらう。解琬は烏質勒の死の直後に彼の牙帳に至つたものに相違ない。

⑮ 岩佐學士「突厥毗伽可汗碑文の紀年」(同氏遺稿) 一九五—七頁

⑯ 前掲書二〇〇頁

⑰ 岩佐學士「河西節度使の起原に就いて」(同氏遺稿) 三五—四六頁

⑱ 前掲書四三頁

⑲ 岩佐學士「突厥毗伽可汗碑文の紀年」(同氏遺稿) 一九七頁

⑳ 松田學士「磧西節度使考」(史潮第三年第二號) 三六—七頁

㉑ 岩佐學士前掲書一八七—八頁

㉒ 松田學士「吐谷渾遣使考」(史學雜誌第四十八篇一四八三—九四頁)。吐蕃に擊破せられた後の此の方面の吐谷渾の末路については戸田茂喜學士「吐谷渾の西藏名と支那史傳」(東洋學報二十七卷一號) 參照。

㉓ 藤枝晃學士「沙州歸義軍節度使始末」二(東方學報京都十二ノ三・五〇頁)

㉔ 松田學士は先天元年における伊西節度の存在を認められたが、「磧西節度使考」(史潮三ノ二、三九頁) 採らない。岩佐學士は流石に伊西節度を存在せずと斷言せられたが、「河西節度使の起原に就いて」同氏遺稿四四頁) 仔細は別の機會に譲られた。氏の事であるから自分の論證とは全く異つたものが或は行はれたかも知れぬが、兎に角岩佐氏の斷言は正しいと認められる。詳細は本文論述の通りである。

㉕ 新唐書地理志に天軍山は開元二年置とある。天軍山は勿論天山軍の譌である。

㉖ 松田學士「磧西節度使考」(史潮第三年第三號六三—四頁)

㉗ 資治通鑑開元三年五月壬辰の條には、默啜が葛邏祿・胡祿屋・鼠尼施等を討つた爲に北庭都護湯嘉惠等が出動し、定遠道大總管阿史那獻をして應援せしめたとある。定遠道では此の場合意味をなさない。全唐文の遠字は明かに邊字の誤である。